

『毎日新聞』は不戦を伝えつづけている

2015/2/10 須田 稔

2015年2月10日付の紙面には、安倍晋三首相の「積極的平和主義」にもとづく集団的自衛権行使や憲法改定など、明らかに『戦争ができる国』作りと思える志向を批判する視点に立つ記事が4篇ある。

① 玉木研二・専門編集委員の「火論」。8日に85歳で他界した工業デザイナーの**栄久庵憲司**さんは、海軍兵学校在籍中に広島と長崎の原爆、敗戦に遭遇した。妹と、後年住職になった父を原爆症で亡くした。

著書『デザインに人生を賭ける』に、敗戦直後の晩夏、広島で出会った〈不思議な光景〉を書いているとして、玉木氏は**栄久庵**氏の文章を引用する。

〈夕日が差してきた瞬間でした。それまでの地獄絵だった風景が茜色に染まって、一瞬のうちに極楽浄土に変貌したように思われました〉

そして、日が落ちると、今度は地の底から這い上がるような怨嗟の声を聞いたように思う。

〈焼き尽くされ、破壊され、ねじ曲げられたものたちが、「自分たちを元にもどしてください」と、私に助けを求めている悲痛な叫び声を確かに聞いたのです〉「・・・」

玉木氏は書く。「・・・**栄久庵**さん・・・深い喪失感と悲嘆を言い表し、そして残した・・・年とともに生の声と息づかいで体験を聞くことは限られてきた。／どれだけ多くの声が埋もれているか」。

② **藤原章生**氏が執筆する「**原子の森**深く 第2部 孤高の闘い⑥」**森一久**氏が1956年中央公論を辞め、原子力関係に転職したとき、当時同僚の澤地久枝さんは「原子力をやることは（左派から右派へ移る）反動的だと思っただった」が、半世紀ぶりに2009年秋、中公のOB会で再会して、「原子力もいけれど、原発の安全性は保証されないう」

と言ったら、**森**氏は「ぱっと光り輝いた顔をして言ったんです。『そうなんです』。森さんを誤解していたんです。」

③ 「**野坂昭如**の『七転び八起き』。第197回 対テロ策 首相の言葉 軍部に似て」。

「2月11日は建国記念日と言うより**紀元**の方が耳になじみ深い」と書く彼は僕と同世代。昭和20年2月、中学2年生の彼は、授業にかわって、壕の整備、家屋疎開な度勤労奉仕の日々。

昭和19年2月11日、今も記憶に残る新聞記事、「**神州**必勝の雄叫び、**紀元**の佳節に決意新た」。さすがの記憶力。1年後、東京大空襲、神戸も2月4, 5, 6, 8日と。「空襲における被害について、大本営は極めて小さく報道。」

「今は、あらゆる情報にあふれ、それを自由に扱える。だが報道管制は行われている。また、マスコミは自主規制をしいている。「テロには屈しない」と繰り返しアメリカの言う「テロとの戦い」を正当化。70年戦争をしてこなかった国の首相が、宣戦布告のごとき言い回しを好む。今のお上のもの言いは、かつて横暴を極めた軍部そっくり。日本は一足飛びに戦争に突き進んでいる」。野坂氏は僕だけでなく多くの主権者の憂慮を代弁しているだろう。

④ **広岩近広**氏の「平和をたずねて」。「核の傷痕 医師の診た記録⑤劣化ウラン弾の悲劇」。

「被爆者には、学徒動員で軍需工場や建物疎開作業に駆り出されて原爆に遭った10代の若者が少なくない」。35年間に約200人の被爆者を診てきた**牟田喜雄**医師は「戦争は悲惨極まる不幸をもたらすと痛感しました」と語る。

2004年11月、「自衛隊イラク派兵違憲訴訟の会・熊本」の共同代表に。「劣化ウラン弾使用による癌などの疾患の多発を含めて、無辜のイラク国民の殺傷に加担することになるという事実は、耐えがたい精神的苦痛です」。